

Luncheon Linguistics, 14 July, 2021

2021（令和3）年7月14日

「スワヒリ語の「現在」と「未来」：ザンジバルの諸方言の記述から浮かび上がる機能変化の道筋」  
発表者：古本 真（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所特任研究員）

ザンジバル・ウングジャ島には、ウングジャ方言 (KU)、マクンドゥチ方言 (KM)、トゥンバトゥ方言 (KT) というスワヒリ語の地域変種があることが知られている。これら三つの方言は、類似した形態統語的特徴をもつ。そのことは動詞の屈折形態論にも当てはまり、テンス・アスペクト・ムード／モダリティ (TAM) の標示に、同源の標識が用いられることも少なくない。

本発表では、バントゥ祖語の\*-cák- ‘desire, want’ に由来する「未来」の標識 (KU, KM, KT)、「現在」や「未来」を表す否定＋母音複写形 (KM, KT)、そしてバントゥ祖語の\*-màd- ‘finish’ に由来する「完了」の標識 (KU, KM, KT) に焦点をあて議論を展開した。これらの形式は、一見すると同じ事態を表すために働いているような印象を受ける。しかしながら、実際の用法を仔細にみても、方言間で機能に違いがあることがうかがえる。

通言語的研究では、文法標識の機能変化が離散的にではなく、一定の傾向に沿って段階的に生じることが指摘されている。TAM 標識の機能変化に関する仮説を参照してみると、ザンジバルのスワヒリ語諸方言間でみられる同源の TAM 標識の機能の違いは、通時的な発達の度合いの違いとしてみなすことができる。